

■学校経営のポイント

いじめと不登校の再点検と指導のあり方の見直し

小島 宏

1学期のいじめ等について点検し、2学期以降を展望して指導と対応のあり方を見直す必要がある。

学級経営を見直す

いじめ、不登校、配慮を要する子どもの指導は、学級経営と大きくかかわっている。校長は、子ども同士の間関係の丁寧な点検と、2学期以降の改善を学年主任や担任に指示・指導する必要がある。

生徒指導を見直す

生徒指導の不安定はいじめなどを誘発しやすい。生徒指導について全教職員で点検させ、当たり前のことが当たり前に行われる学校にする必要がある。筆者の体験からも、問題行動の減少も学力の向上も基本的な生活習慣や校則の確立にかかっていると言える。

授業を見直す

分かりにくい退屈な授業が、授業崩壊や不登校等の引き金になる例が少なくない。学校として共通のチェックリストを作成し、教師個々の自己評価や学校全体の実態把握として、充実した授業が日常的に行われているか確認する必要がある。授業の充実が教師の責務であることを全教師に自覚させたい。

いじめは犯罪である

「いじめは悪いこと、人権侵害であり、犯罪である」という価値基準をもって「指導と予防と対応」に当たることが重要である。いじめに起因する痛ましいことが起きてからではあまりにも遅すぎる。

いじめはどの学級にも、どの子どもにも起こり得る。いじめは犯罪であり、人間として許されないことである。まず、このことを繰り返し指導し、いじめをしない子どもを育てるようにする。そして、校長はじめ教職員は、アンテナを鋭くし、いじめを見つけようと意識して見つける。仲良しグループを偽装した巧妙ないじめ、喧嘩を演出したいじめ、見え

にくいところで執拗に続くいじめ、他愛無いたくが氷山の一角になっている根深くいじめがある。少しでも兆候があったら直ちに徹底的に対応する。

その際、いじめられている子どもを守り抜くのが教師・学校の役割であることを肝に銘じて、学校をあげて組織的に誠実に進めることである。

さらに、一応の決着が付いたように見えても、深刻化や再発がないか最後まで見守り、解決するまで指導と対応の手を抜かないことが肝要である。

また、保護者PTAや地域にも啓発し、協力を得て学校ぐるみ、地域ぐるみで取り組むようにする。

7月以降の各新聞のいじめに関する報道は、教育委員会や学校・教師の指導・対応のあり方や配慮すべき事柄に多くの示唆を与えてくれる。

不登校という行動の奥を読み取る

不登校は本人と家族が一番苦しんでいることに思いを致し、悩みや心配を聞き尽くし、その子の心や思いに届く対応が求められる。学校と保護者と相談機関等で連携し、要因を把握し、段階的にほぐしていくことが重要である。この場合も、学級の子も同士の間関係やいじめ、分かりやすい授業などが大きくかかわっていることに留意する必要がある。

特別な子ども集団をつくらない

どの学級にも何かと配慮を要する子どもたちが存在する。手の掛からない子どもたちと、手の掛かる子どもたちに区別化し、特に何事かが起こらなければよしとしている学級担任が少なくないが大きな問題である。互いのよさを認め合い、みんなで協力し合って楽しい学級を作っていくのは学級経営や道徳教育のねらいでもある。同じ学級にあって、二つの集団がかかわりなく生活している不自然さ、非教育的であることに気づき、改善する必要がある。

(こじま・ひろし＝(財)教育調査研究所研究部長)

●長期休業開けの不登校対策に！ 9月上旬刊、予約受付中！

不登校問題で困ったときに開く本

【著】小野昌彦(宮崎大学大学院教授) A5判・約160頁／定価2100円